

資本主義は社会主義に必ず変わる

『空想より科学へ社会主義の発展』に学ぶ

第10回 東京ブロック

資本主義生産の発展と矛盾の拡大

司会 Ⅱ 前回は「価値法則」まで行いました。今回は、資本主義生産方法による商品生産の成長と発展、および矛盾の拡大について学びたいと思います。東部協のレポートの報告をお願いします。

SKⅡはじめに、資本主義的生産の特徴を再確認したいと思います。

第一は、生産の無政府性（無計画性）です。だが、どこで、なにを、どれだけ作るかは、各人の自由です。でも、目に見えない価値法則が働き、社会は成り立っていることを前回は学びました。第二は、単純協業からマニ

ユファクチャーを経て、大工業の商品生産へと分業が進化し社会的生産になります。第三は、生産手段の私有と同時に生産物（商品）の取得もブルジョアジーのものとなることです。

これらを基本に据えて、資本主義的生産は、テキストには書いていませんが拡大再生産を繰り返して成長・発展してきました。そこでエンゲルスは、産業革命後のイギリスに渡り、社会の土台である経済構造の変化と発展および矛盾の拡大について、ブルジョアジーとプロレタリアートの関係はどうなっているのか、自分の目で見て、自分の

頭を使って調査・研究し、矛盾の拡大とその解決方法を発見したのです。

司会 Ⅱ SKさんお得意のざっくりと資本主義的生産方法の特徴点を三つにまとめてもらいました。これが基本ですね。続いてお願いします。

産業予備軍の法則

SKⅡ小経営のマニユファクチャーから大工場の生産方式になると多数の労働者が必要とされ、農民やギルドの職工・親方など中産階級から賃金労働者として駆り出されてきます。大工業の



職安に押しかける失業者（1949年）

資本家は他の資本家に負けないために、より良い商品を、より安く、大量に作るうと機械の改良を重ねます。その結果、今まで仮に10000人の労働者が働いていたとします。機械の改良で半分の人数で、今まで以上の生産を行うことができるようになります、5000人の労働者は不要となり首切り・失業に陥るのです。

生産の無政府性（自由競争）は、失

業の不可避性を生み出します。エンゲルスは「産業予備軍の法則」といい、①産業界の多忙な時には自由に利用できる、それに必ず続く恐慌の時には、容赦なく路頭に放り出される労働者です。②賃金を資本の要求に合うような低い水準に引き下げる役目をする調整器と言っています。今日的には、「非正規社員」といわれる存在も同様と考ええます。

司会 失業の不可避性、産業予備軍として、賃金を引き下げる調整器として、失業者は常に作られる。「法則」だから、「必ずそうなる」と言っています。どう思いますか？

HG 私は1974年に高卒で入社しました。日本は戦後の高度成長期で私もそうですが、地方の田舎から都会へ出てきて就職し働きました。失業者が生み出されるのは、法則だと言われてもピンときません。一般的常識では、誰しも失業はしたくないから、就職す

る時に、この会社の将来性や安定感を考え、選んで就職すると思います。また、いい会社、いい職場に就職するために、まずいい学校に入り勉強して就職に有利になると、親も子も必死で競争社会に負けないようにしようと考え行動していると思います。だから、失業したら、本人や親が悪いと思うのが一般的だと思います。

司会 次の課題とも関連します。先に、次のレポート報告を受けてから討論を続けます。

窮乏化の法則

SK 次に、生産の無政府性の成長・発展の具体化です。例えば、靴生産の小経営会社が当初100社あったとします。拡大再生産が繰り返されます。靴の販売価格は、社会的平均的価格で売られます。その平均価格が1万円だったとしたら、1万円以上のコストを

かけているところは倒産します。倒産した会社とその市場は生き残った会社へ吸収されます。

このように、当初100社あった会社が、50社、10社へと資本の集中・集積が起こります。それは一方における富の蓄積として現れます。と同時に、反対の極に労働者階級の側には、貧困、労苦、奴隷状態、無知、野獣化、道徳的墮落の蓄積として現れます。このような現象を、マルクスの『資本論』では「資本主義的蓄積の一般的法則」で述べています。

自分でレポートして疑問に思ったのは、先の唯物史観の時に、社会の土台は下部構造に経済構造の変化・発展が基底的で上部構造である政治や法律は下部構造に規定されると学びました。だが、この章の「資本主義の発展」には「資本の運動とか」「下部構造の変化・発展」は詳しく出てない。なぜ、ですか？

司会II レポーターのSKさんから疑問点が指摘されました。SIさんの見解をお願いします。

SI II 古典学習に限らず、テキストはその時々で社会情勢に合わせて作られることが多いのです。冒頭に学習したように、マルクスとエンゲルスは1848年に『共産党宣言』をロンドンで公開し、旧い共産主義から脱皮した、かれらのあたらしい共産主義者同盟の綱領として宣言しました。

その30年後に発刊されたのが、今回の『空想より科学へ』で、当時のヨーロッパでは空想的社会主義者がほとんどであり、ベルリン大学の私講師であったデューリングの人氣が高かった。だが、『反デューリング論』を出し、マルクス・エンゲルスの世界観を労働者に提示しました。その中の、「科学的社会主義とは何ぞや」という大問題にこのテキストは答えているのです。

と同時に、その前にマルクスとエン

ゲルスは何度も会い、二人の調査・研究したものを突き合わせ、互いに分担しました。エンゲルスは『空想より科学へ』、マルクスは『資本論』第一巻を書き、発刊しています。SKさんの疑問点である「資本の運動」とか「下部構造の変化・発展」については、『資本論』学習に委ねたいと思います。つまりこの本の発刊された時代背景や社会情勢も含めて学習する必要があるのではないのでしょうか。

司会II ありがとうございます。『資本論』に何が書かれているか、Mさんに要点を説明してもらいましょう。

M II マルクスは、資本主義社会の基礎形態である「商品」から出発し、その商品の内在的論理とその矛盾について研究しました。具体的には、価値と使用価値の統一体である商品から出発し、一般的等価物の貨幣出現の必然性を論証します。貨幣は労働力という特別な商品を購入することにより、生産過程

◆みんなの学習講座

・ソフトウェア開発・機械設計・放送機器等操作・放送番組等演出・事務用機器操作・翻訳・通訳・速記・秘書・ファイリング・調査・財務処理・取引文書作成・デモンストレーション・添乗・建築物清掃・建築設備運転点検・整備・案内・受付・駐車場管理等・研究開発・事業の実施体制等の企画・立案・書籍等の制作・編集・広告デザイン・インテリアコーディネーター・アナウンサー・QA インストラクション・テレマーケティングの営業・セールスエンジニアリングの営業・金融商品の営業 放送番組等における大道具・小道具スタッフ

に取込み資本となり、価値増殖運動を展開します。
ここで明らかにされたのが、剰余価値を生産する特殊商品である労働力商品です。この剰余価値の生産を搾取することが資本の目的であり、特別剰余価値、相対的剰余価値の生産がいかになされるか科学的に立証したのです。
司会Ⅱそうですね。必要な部分は補足

派遣専門26業種

説明も含めて進めていきましょう。先の産業予備軍の法則、窮乏化の法則はわかりましたか？
TKHIGさんが言っているように、私たちの時代は終身雇用制で、ある程度雇用は守られてきたと思います。私たち団塊世代の子どもたちの世代は、バブル崩壊後の「就職氷河期」と言われ、派遣労働が解禁され、男女機会均等法の成立で、母性保護で守られていた諸権利部分が奪われ、女性も男性と同じように働けとされてきました。この制度の基本的部分が1995年に当時の日経連が打ち出した「新時代の『日本的経営』」といわれるものです。これまでの、正社員を中心とした終身雇用制の廃止、ボーナス・退職金の廃止です。3種類の労働者グループに分けるとしました。①長期蓄積能力活用型グループです。正社員が基本ですが、年功序列型賃金を改め、成果主義賃金体系の導入です。②高度能力活用グル

ープです。例えば、税理士とか会計士など特殊技能を有する職種です。近年は、「高プロ」と言われ「残業代ゼロ法案」の成立の的です。③雇用柔軟型グループです。派遣社員、嘱託社員、契約社員、パート(短時間勤務)・アルバイトなどの非正規社員です。
HGIH当時、2000万人の合理化と言われました。2000万人も合理化できるか！と思っていました。今日は全労働者の4割・2000万人以上の人たちが非正規といわれる層になり、資本の意のままに私たちの人間らしい権利が奪われてきていますね。
司会Ⅱ窮乏化法則・資本主義的蓄積の一般的法則についてはわかりましたか。MIIマルクスの生きた時代は、重商主義から自由主義の段階で、資本の自由競争ですから、負けた資本は吸収され、資本の集中・集積が繰り返されていくのはわかります。マルクスの死後に、自由とは反対の市場を独占する「独占

資本」が発生し、帝国主義段階へ移行します。レーニンが、マルクス・エンゲルス主義を継承し『帝国主義論』を發刊しています。興味のある方は一読ください。

HKII「資本主義的蓄積の一般的法則」は、当時よりも今日の方がよはつきりしていると思います。景気が上向かない、不安定だ、と言われながらも、日本も世界も企業の内部留保は毎年膨れ上がっています。他方の労働者階級は、誰もが言ったように非正規で年収200万円以下が4割以上です。人間らしい生活はできませんね。貧困、労苦、奴隸状態、無知、野獣化、道德的墮落、まさにその通りだと思います。でも、なぜ、日本の労働者は怒らないのか、なぜ、安倍政権の支持率は下がらないのか不思議です。この問題は最後に議論して欲しいと思います。司会IIありがとうございます。次は、恐慌について説明してください。

恐慌の発生

SKII近代的機械の改良能力は極端まで増加し、この能力は個々の産業資本家にとって、自分の機械を絶えず改良し、その生産量を高めねばならぬという強制命令と変わりました。大工場の膨張力は質的および量的膨張力として現れました。

しかし、その生産力の膨張に対する障碍をなすものは、消費であり、販路であり、大工場の生産物の市場です。市場の膨張力は生産の膨張力に比してはるかに弱い法則であり、市場の拡大は生産の拡大と歩調が合わなくなり、生産と消費の矛盾です。この衝突は不可避となり、周期的に現れました。最初の全般的恐慌が勃発したのが、1825年で、その後にはほぼ10年に一回、大混乱が起こりました。交易は停止し、市場は充滿し、生産物は山と積み買い手がなく、現金は姿を隠し、

信用は消え、工場は閉鎖し、労働者大衆はあまりに多くの生活手段を生産したために、生活資料にことかき、破産は相次ぎ、競売、競売また競売です。

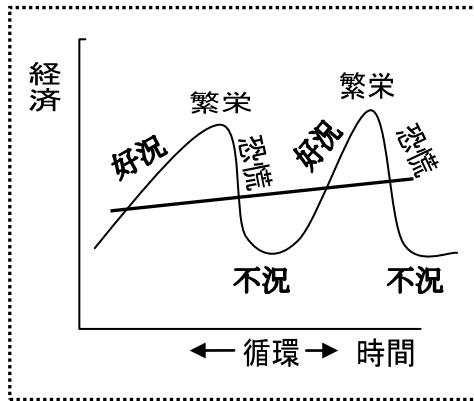
不況は数年間続き、生産力も生産物も大量に浪費され、破壊される。山積された商品が多かれ少なかれ減価して、再び動き始めるまで、こういう状態が続きました。テキストには1877年まで数えて5回起こったと記しています。いわゆる生産過剰恐慌です。

SIII恐慌は、約10年周期で起きたと言っています。恐慌の度に資本の集中・集積が起き、資本は大きくなり、生産力が拡大し高まってくるのは分かりますが、恐慌のメカニズムをわかりやすく説明してください。

MII恐慌発生のメカニズムですね。景気循環について「社会科学」の授業で習いませんでしたか？

景気循環は、左図のように、好況↓繁栄↓恐慌↓不況↓好況と循環運動を

◆ みんなの学習講座



繰り返します。S Iさんの指摘するよう、初めの繁栄の時よりも次の繁栄は生産力が高まっているから高い繁栄になるわけです。

ですが、逆に恐慌時の落ち込みもまた激しくなります。

OK II 恐慌発生のメカニズムは商業資本の商品在庫が累積し、債務超過で銀行は支払いの滞った不渡り手形を抱え、倒産が連鎖し、恐慌の発生に至ります。



1929年のウォール街

SK II 私たちの生きてきた時代には、恐慌はないから実感がわかないね。

OK II ブラックチユーズデーと言われた1929年10月24日(木)に端を発したアメリカ合衆国の株価(ウォール街)の下落は、全世界に広がる前例のない規模であり、株価大暴落は1ヵ月続きました。ダウ工業株平均は20世紀始まって以来の最安値となり、29年水準まで戻るのには54年までかか

つたと言われています。また、その後2008年のリーマンショックまで世界恐慌はないとされています。

M II 生産力を上げるために、常に機械を改良し、拡大生産を繰り返していきます。特別剰余価値・相対的剰余価値の増殖のために、労賃は低く抑さえつけられます。生産の膨張率は生産手段(機械等)の改良で拡大します。しかし、労働者は商品生産し剰余価値を生み出すだけでなく、その商品の消費者です。労賃が低く抑さえつけられたら、消費・市場の拡大はできず、恐慌が起こることになります。

今日、恐慌が起きてないといいますが、長期不況状態が延々と続いており、またいつ大恐慌が起きてもおかしくないのです。資本主義には未来はない！ということだと思えます。

司会 II ありがとうございます。次回は、テキスト学習の最終回、社会主義社会の必然性について学びます。